天台大師の三観思想

研究員　関口　中道

三観は天台教学の基礎をなす思想であるが、大乗経典をもとにした他の教学とも共通点が認められる。例えば、空海教学の「十巻章」の一である『菩提心論（金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐菩提心論）』と比較してみると、具体的な行法は当然異なるものの、その意義と目的においては三観思想と大いに共通点が認められる。

『菩提心論』は、勝義・行願・三摩地の三で表される。勝義ではまず「一切の法は自性なしと観ず」と無自性に諸法を観じることを前提として、「諸々の外道等はその身命を恋しんで、或いは助くるに薬物をもってし、仙宮の住寿を得て、或いはまた天に生じるを究竟とおもえり」、「二乗の人、声聞は四諦の法を執して、縁覚は十二因縁を執す。四大・五陰は畢竟磨滅すと知りて、深く厭離を起して衆生の執を破し、本法を勤修してその果を剋証す」とする外道と二乗の立場を「二乗の人は人執を破すといえども、なおし法執あり」、「化城より起って、三界を超えたりとおもえり」等と否定している（註1）。

天台の三観思想においても空観が成り立つ前提は『中論』第三偈の四句推検などにあるのだが、これは自性を自・他・共・無の四つの観点からの考察により自性を否定するものである（註2）。これを前提に「愛論はすなわちこれ魔業、見論はすなわちこれ外道の業なり。ゆえにこの経にいわく、天魔とは生死を楽い、外道とは諸見を楽うと。いわゆるこの愛見によって九十八使を起こす」、「隨情に仮を明かせばすなわちこれ聲聞経の所説なり」等と外道、二乗の立場を『菩提心論』と同様に否定している（註3）。

このように両者は、無自性を前提として外道、二乗の立場を否定する。その上で『菩提心論』では、例えば行願において「我れまさに無余の有情界を利益し安楽すべし（中略）言うところの利益とは、いわく、一切有情を勧発して悉く無上菩提に安楽せしむ。終に二乗の法をもってしかして得度せしめず」、「また大悲門の中において、もっとも宜しく拯救すべし。衆生の願に随ってしかもこれを給付せよ。ないし身命をもしかも惜せず」と慈悲と化他にもとづく菩提心のことを説明している（註4）。これは、「入仮の因縁とは、略していわく五あり。一つに、慈悲心重とは、初めに仮を破するとき、諸の衆生の顛倒獄縛して出ずるを得ること能わざるを見て、大慈悲を起し、愛すること一子に同じ（中略）二つに、本誓願を憶うとは、もと弘誓を発して、抜苦与楽して安穏を得せしめんとす（以下、略）」（註5）等とする三観思想の仮観と同様であると言えよう。

続いて『菩提心論』においては三摩地、三観思想においては中道観・一心三観とその境地を表明するのであるが、両者はともに勝義・行願、空観・仮観を前提とする行法であり観法である。具体的には阿字観、三三昧などと異なる

が、その目的と意義は同様に見えるのである（註6）。

天台の三観思想は、他の教学とも共通点が見いだされるのであり、それらを広く理解することでより説明が容易になるのでなかろうか。

（註1）『菩提心論』大正三二・五七三上。
（註2）『中論』大正三〇・二中。
（註3）『維摩詰経三観玄義』新続蔵五五・六七〇中。
（註4）『菩提心論』大正三二・五七二下。
（註5）『摩訶止観』大正四六・七五下。
（註6）『菩提心論』大正三二・五七三下からの三摩地の説明と『維摩詰経三観玄義』新続蔵五五・六七三の中道第一義観の説明など参照。